槍と薬は使いよう

エクスカリバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
槍と薬は使いよう

【Ｎコード】
Ｎ６１９６Ｆ

【作者名】
エクスカリバー

【あらすじ】
あるものを手に入れるために人間の国へと旅立ったエルフが２年後に主人公と出会い、一緒に旅をすることになる。はたして目的のものを手に入れることはできるのだろうか？＃＃＃旅の様子を描いた異世界ファンタジー小説です。よろしければ見ていってください。

プロローグ

思わずピクニックにでも行きたくなってしまいそうなほど地上には太陽から透き通った黄金のしずくが降り注いでおり、体を包むような心地よい風が吹いている。こんな良い天気のなか某所では、老若男女が机をはさんで一つの懸案事項について話し合っていた。

性別も身長も異なってはいたが、よく見ると共通の特徴をひとつだけ垣間見ることができる。何を隠そう……全員が全員、耳が一般的な『人間』より長くとがっていた。エレニア国では、一般的に『エルフ』と呼ばれる種族である。

あえてもう一つの共通の特徴をあげるとするならば、全員が非常に困った顔をしていることだ。それほどに話し合っている内容が重大なのだろう。

時を溯るほど10分前、現在の状況は一人の老人の手によって作り出された。

○●○

「皆の集、よく集まってくれた。今日、集まってもらったのはほかでもない、村が始まって以来の緊急事態が起こったのだ」

どうやらこの話し合いでのリーダーのようだ。既に顔の表情は曇っており、眉間にはしわが寄っている。事態の深刻さを物語っていた。

ただ事でない雰囲気を察した全員は、息をのんでリーダーの方をじっと見つめている。しばらくしてリーダーは口を開き、ためらいを見せながらもひと言ひと言を絞り出すようにつぶやいた。

「“あれ”が無くなりかけている」

この言葉を聞いた瞬間、その場にいるエルフたちから表情が消えた。どうやら“あれ”とだけ言っているにもかかわらず、残らず理解できているようだ。そしてこの状況が1分続き、2分続き……ついには10分が経過してしまった。

「冗談とか数え間違えではないのですか？」

ようやく一人が口を開いた。聞いたことはあくまで確認ではあったが、そうであってほしいと言わんばかりの表情をしていた。おそらくこの場にいるエルフ全員が同じことを望んでいるに違いない。

「そうであればどれほど良かったことか……」

予想はしていたが期待はしていなかった言葉が返ってくる。あらかじめ予想されていたとはいえ、いざ現実を突きつけられるとさらに落ち込んでしまうのは当然の反応といえるだろう。

「何か“あれ”に代用出来るものはなかったかしら？もしくは、“あれ”を私たちで作る方法は？無いの？」

１２，３歳位のかわいらしい女の子が全員に質問するような形で問いかける。外見からは想像もつかないほどの冷静さだった。

「残念ながら期待に添えるような返事を返してあげることができそうもない。この村のありとあらゆる文献を調べてはみたが、代用品や作り方なんかは何も書かれていなかった」

「では、人間たちの国には無いのですか？」

「可能性がないわけではない。文献によれば、“あれ”はもともと人間がこの村に持ってきたものらしいのでな」

この言葉は絶望という淵に落とされていた者たちに可能性という一筋の光を与えた。すぐにでも手掛かりを探しに人間の国へ行きそうな者もいれば、すでにドアノブに手をかけているものまで現れている。

「だが、われらがこの村を離れるわけにはいかないし男たちを行かせるわけにもいかない。村の安全に関わるからな」

冷静になって考えてみるとまさにその通りである。外へ出ようとしていた者は顔を真っ赤にして、苦笑いを浮かべながら席に戻る。

「では必然的に女性が行くことになりますね。外の世界は物騒ですし、腕の立つ者はいましたか？」

すると全員がぶつぶつと名前を呟きながら、条件に当てはまる者を考え始めた。そして、ほぼ同じタイミングで全員が一人の名前へと行きついた。

実を言えば、あらかじめ予想はされていた事態ではあった。エルフという種族自体が争いを好まないため男性が戦いや狩りなどを一手に引き受けている現状があり、必然と言えば必然であった。

「マーラは……どうだろうか？」

この言葉に全員が納得といった表情。それもそのはず、早くから父親を亡くしていた彼女は父親の代わりをするために戦いのすべを学んでおり大人顔負けの腕前、エルフの専売特許である精霊魔法もかなりのものなのだ。

だがこんなにあっさりと終わるほどもちろん甘くはい。この程度のことならばそもそも話し合う必要はないのだから…。

「それなのだ、私が一番悩んでいるところは。マーラならばこの役目にうってつけだろう。しかし、まだ成人しておらん。一度でも森を抜けてしまえば二度と帰っては来られまい。行ったとしても意味がないのだ」

エルフの里は森に囲まれており、エルフだと森に認められた者のみが入ることができる。その条件が成人していることというわけだ。エルフの成人は特に決められた年齢があるわけではなく突然、自分で理解するものらしい。

「だれか、マーラが帰ってこられる方法を知らないか？」

すると、とたんに顔が下を向く。そんな都合のいい話はそうそうないということであろう。これまでか…と全員が思い始めたころ、一人が突然喋り始めた。

「えーっと…うちのひいばぁちゃんから聞いた話なのですが……
……」

言っている本人いたって真面目だったが、想像以上に突拍子もない話だった。

「その話は本当なのか？」

「確証はありませんが…」

酒場でさえ聞くことができないような与太話。非常時でなければ取り合ってさえくれないだろう。だがしかし――――――

「この話を信じるほかはないようだな。マーラには酷な話かもしれないが仕方がない、村を救うためだ。だれか、すぐにマーラを呼んでくれ。」

――――――今はその非常時だった。

この瞬間、本人の全く関与しないところで人間の国へ旅に出ることが決まってしまった。マーラ、１８歳の時のことである。

プロローグ（後書き）

初めて書いた小説なので、意見・感想などを頂けると参考になります。もしよければ書き込んでいってください。

第一話　いつもの朝？

夢の世界から帰ってきたばかりでボーッとしている僕の頭は真っ白のまま。とりあえず窓のカーテンを開けてみる。太陽の光が降り注いでいる。どうやら今日も平穏に朝を迎えることができたようだ。起きた時間もいつも通りといったところだろう。

さて、朝ごはんを食べたいのは山々なんだけど…春になったばかりで肌寒い。温かいベッドから抜け出るのは一苦労。けど、いつまでも寝ているわけにはいかず心の中で自身を叱咤激励する。

早く行動に起こさなければ二度寝してしまいそうなので布団に手をかけるが、中に何かいることに気づく。スースーと規則正しい寝息を立てている。そっと布団をめくってみると、そこには天使が眠っていた。

当然と言えば当然だが本物というわけではない。その天使の名前はリズリィ。僕――リック＝ローラントの妹である。身内というひいき目を差し引いてもかわいらしい部類に入ることは間違いなく、その年齢ゆえのあどけなさは筆舌に尽くし難い。とまあ…軽く妹が如何にかわいいかを語ったところで、そろそろ起こさなければならない時間となる。

「リズリィ～、起きて～。朝ごはんがなくなっちゃうよ！」

ゆさゆさと軽く体を揺らして覚醒へと導く。やがてリスのように顔をこすり目を覚ます。

すると何を思ったのか、小悪魔のような笑みを浮かべるリズリィはそのみずみずしくてふっくらとした唇を僕の方に向け、

「にーさん、お姫様は王子様のキスで眠りから覚めるんですよ」

と、突拍子もないことを言い出し始める。

リズリィはお姫様で通じるだろうけど…。かなり盛大に突っ込み所を間違えているのは気のせいではないのだろう。

すると、痺れを切らしたリズリィが「隙あり！」と言わんばかりに唇を重ねてくる。

優しく甘いキス。ほおを赤らめてご満悦の様子のリズリィは名残惜しそうに唇を離す。

一方、突然のことに思考が追い付いていかない僕は壁と向かい合い呆然となながめているだけだった。

「じゃあ、先に下に降りますね。にーさんも早くしたほうがいいですよ！」

いつもと変わらないリズリィの声でようやく壁とのにらめっこが止まる。どっか遠くに行っていた心が戻ってきた感じだった。部屋の外からは階段をトンットンッとテンポよく降りて行く音がする。どうやらキスをしてすぐに降りていったらしい。

別に兄妹なんだしキスくらい普通…じゃないよな。朝っぱらから妹の将来に一抹の不安を覚えたが、そのことはとりえず置いておき、妹と同様に階段を降りて一階へと向かう。

下に降りるとテーブルにはすでに朝ごはんが並べられており、父さんとリズリィはすでにイスに腰をおろしてお茶を飲んでいる。母さんはと言えば台所でご飯をよそいでいた。

見たところ、まだ誰も朝ごはんに手をつけておらず、ホッと胸をなでおろす。

「お前は本当に朝が弱いな。そればっかりはいつまでたっても変わらん」

朝一番のあいさつとしては不適切でぶっきらぼうな物言いをするこの人は、僕の育ての父親である。やや厳つい顔をしている割に（僕を除く）誰にでも優しい。薬師として薬屋を経営しており知識・腕前ともに一級品なので近所の人からはかなり慕われている。うちの家は代々の薬師の家系らしく父さんで２８代目。そのことも相まってか、村の相談役といたところだ。

「リックくんはお寝坊さんだからいいじゃない」

で、僕のことをリックくんと呼んでいる女性は僕の育ての母親である。才色兼備・良妻賢母といった言葉を体現しているうえに、横を通り過ぎて行く１０人が１０人必ず振り返ってしまうような美しさを兼ね備えている。子供を産んだ人のスタイルとはとても思えないとは近所の奥様方の談である。こんな美人がなぜ父さんと結婚したのかは定かではないが、僕が予想するに媚薬か惚れ薬を食事に混ぜられたのではないかと思う。父さんに良い所がないと言いたい訳ではないが、外見だけを見ればまさに“美女と野獣”の組み合わせになってしまうのだからこれくらいは勘弁してほしい。

「にーさんをいじめるお父さんは嫌いです」

そして最後が僕の妹のリズリィ。先日１４歳になったばかりである。

年を重ねるにつれて僕への依存が大きくなっているようで…。そ

ろそろ「結婚したい！」などと言い出しそうで内心ビクビクしている。

「そ、そんなことを言わないでくれ。父さんは悲しい」

言葉には動揺見られ、半分涙目になっている父さんはとりあえず放置して、目の前にある朝ごはんへと手を伸ばし赴くままに欲求を満たし始めるのが僕、といった感じ。なんやかんやで割とつり合いが取れているのだから家族というものは面白い。

…とまあこんな感じで朝食が始まっていくのが我が家の食卓である。この後に今日の天気や予定といった、たわいのない話が出るはずなのだが今回は一味スパイスが効いているようで…、

「そーいえば、にーさん。私の唇はどうでした？」

「そりゃーやわらか…」

…うん、言葉を訂正しよう。スパイスは効いているがどうやら効きすぎているみたいだ。普通の会話だと思って反射的に返事を返そうとした自分を悔やんでも悔やみきれない。リズリィのことだからこれを狙った上で言ったんだろうけど、何もこの場で言わなくても…。が、言ったことをなかったことにすることはできないので行き場のない憤りを食欲へと変換しながら、いつもの三倍のスピードで朝食を食べるとおもむろに席を立つ。

「じゃ、じゃあ先に店の方に出てくるからお先に」

あまり誇れることではないがいわゆる戦略的撤退である。師匠から聞いた話によれば東方の国には“三十六計逃げるに如かず”とい

う格言があるそうだ。まさにこの状況を想定して作られたものだ、と心の中で偉大な先人に感謝をする。

しかし、現実はそう甘くはなく、

「リック、ちょっとだけ男同士の平和的な話し合いをしようじゃないか」

僕は身動き一つできないほどの力で肩を掴まれていた。

「けど、父さん。店の準備をしないとお客さんが来「そんなことは後回しでいい。店長のおれが言ってるんだ、気にするな！なっ？」

有無を言わせないような怒涛の攻めで、あっさりと退路を断たれてしまう。おそらく東方の先人は父さんのような人間がこの世に存在していることを知らなかったのだろう。

「じゃあ今から倉庫に行こうか？時間がもったいないし、さっさと終わらせるから。腕には自信があるしお前も心配するな」

……この場合の腕の自信が薬作りの自信を指していないことをここで明言しておこう。

第二話　桃の木の下で

「ふぅ～、危なかった」

もう少しのところで冥府へと強制的に送られてしまうところだった。母さんが助け船を出してくれなかったらどうなっていたことやら…。うちの最高権力者が母さんでよかった。

んで、ぼくが何をしているかといえば、ちょうど店から出たところ。村の近くにある森に住んでいる師匠のところで修業をする予定だからだ。

「それじゃあ行ってきます。」

「いってらっしゃ～い。気を付けてね～」

母さんが「どこに？」とは聞いてこないのは毎日の日課となっているから。もう6年以上も続いているせいか、きちんとこなさないと逆に体がムズムズするほど生活の一部となっている。依存症みたいで少し怖くもあるが、特に実害は見られないので別段気にはしていない。

さて、ここで唐突な話なんだけど…無性に散歩がしたい自分がなぜかいる。

これが春の持つ魔力ってやつかな…いや、潤いを求めているだけか。

（朝っぱらからひと騒ぎあったから仕方がないよね）

と、こんな感じで自己完結。村を軽く散歩することにした。

僕の住んでいるナチャクは都市部から離れた地域に位置する農村で、辺り一面が豊かな自然に囲まれている。季節が変わるたびに四季折々の表情をみせる草花は、他と比べるのもおこがましいほどの美しさだ。今いる場所が村の中だろうとさしたる問題ではない。それを証明するかのように一本の樹が視界へと入り込む。

その木の種類は桃――――――かつて村へと移り住んできた人が、故郷である東方から持ってきたいくつかの木のうち、唯一この地に根を張った木である。魔を払う性質があるとされており、現在では村の神木として祀られている。さらに言うなら、この木には恋愛成就の神様が憑いているらしく、プロポーズや告白の人気スポットにもなっている。

誰が言ったのかは知らないけど、あながち間違いではないところが噂のすごいところだろう。が、正確に言うなら神様ではなく精霊で、しかも気まぐれ屋なのであまり叶えてはくれない。本人曰く「自分でどうにかしろ」ってことらしい。…ここでひとつ言っておきたいことは、僕が妄想癖を持っているわけではなく実際に精霊が目に見えるってこと。家族に冷めた目線を送られるのはごめんなので秘密にしている。

（せっかく来たことだし、たまには話しでもしに行くか）
他の人に見られると厄介なので辺りをキョロキョロしつつ、桃の木に近づく。

すると、すぐそばに見知らぬ女性がたたずんでいた。腰のあたりまで伸びている金色の髪、陶磁器のような白いはだ、スラリと伸びた足、空に向かってピンッととがっている耳、まごうことなき美人である。全体として細く儚げな容姿ではあるが、道端に咲く野花のように強い生命力を秘めている印象を受ける。

「あの～、もしかして旅の方ですか？」
思い切って声をかけてみる。
「そうだ。この村にある薬屋に用事があって来た。キミはどこにあるか知っているか？」
「……え、えっと、この道をまっすぐ進んでつきあたりを左に行ったところに」
クールな物言いに思わずドキッとしてしまい返事が遅れてしまう。その声色からは他を寄せ付けない感じもなければ積極的に仲良くなろうという感じもみられない。まあ、初めて会った人間に対してはこれ位が普通なのかもしれないが…。
「なんだ、かなり近くまで来ていたらしいな。キミ、助かったよ。なかなか人に会わなくてね…少々困っていたんだ。ありがとう」
と、謝辞を述べ、僕の来た道を辿るように歩いて行った。
あまり困っているようには見えなかったけど、今のが人助けになれば僕としてもうれしい限りだ。笑った顔が見られなかったのは少し残念ではあるが、まあ良しとしよう。
（さて、当初の目的を果たしますか）
そのために、さらに桃の木へと近づく。徐に左腕を上げて、木の幹を軽くコンッコンッとノックする。少しの間、沈黙が辺りを包み込む。
（寝てるのかな？）

そう思ってもう一度ノックしようとしたその瞬間に、

「なんかうるさいなぁ。こないな朝っぱらからどなたはんが…ってリックかい。

少しの間見ないうちに大きくなりよったね」

「お久しぶりです、モモ姐さん。最後に会いにきたのがもう6年も前になりますからね。

僕だって少しは大きくなってますって」

手乗りサイズで空中に浮かんでいるのが、桃の木の精霊ことモモ姐さん。なりは小さいが器が大きくこの辺り一帯に住む精霊の中で一番の古株らしい。精霊たちは相談事があるとまずはモモ姐さんのところにやってくるほど。ぼく自身も姉に憧れと羨望を抱いていたので姐さんと呼ぶことにしている。

「まだ6年しか経ってへんのか。ほんまに人の一生は短いちゅうわけや」

「そもそも精霊の常識を人間に当てはめること自体が間違ってますよ」

寿命という生命の限界がない精霊と、たった数十年しか生きられない人間の考えが同じであることの方が逆におかしいのは当然だろう。精霊と共に暮らし続けられるのはエルフくらいなものだ。

「そないもんか…まぁそれはそれでえーや。ところで今日は何の用や？まさか、好きなやつでもできたんかいな？あんまり叶えるのは好きではおまへんけど、他ならぬリックの頼みやさかい聞かんでもないで～」

「さびしい話ではあるんですが、いないんですよ」

好きな人…と言われて思い浮かぶ人がいないのは、女性に興味がないということには全く結びつかない。ただ、周りの環境に問題があるから思い浮かばないだけだ。

世間一般で言うところの結婚適齢期（１７歳）にそろそろさしかかってはいるが、並の人では妹から物理的に抹消されてしまう恐れがある。そのため相手を見つけるのも並大抵の苦労ではないのだ。そのことを考えるだけで探す気はごっそりと奪われ、思わずため息がでそうになってくる。考えのベクトルが限りなく反対方向へと向き始め、表情がだんだんと暗くなってきた。

「垂直にそびえ立つ壁を道具なしで登るような恋愛になりそうやな」と、苦笑しながら姐さんが他人事のように酷評する。まぁ、他人ごとなのだが…。

「頭ではわかってはいるんですが、実際に言われると…堪えます」

せめて妹に彼氏の１人でもできればいいのだが、その願いはどうやら叶いそうにもない。

一度この話を振ってみたが、

『寝言は寝て言うから許されるんだよ…にーさん』

と、笑顔でお説教を食らってしまった。

こんな話をしたのは、後にも先にもこの時だけになったことは言うまでもない。

「まっ、とにかく彼女ができたら必ずウチに報告するんやで。祝福してあげるさかい」

その時がいつになるかは想像さえできそうにない。僕の想像力がなさすぎるのか、はたまた現実味が圧倒的に足りないのか。どちらが原因なのかは火を見るより明らかである。

「兆が一そんな時がくれば、ぜひお願いします」

さきほども前述したが、姐さんは恋愛成就の話になると途端に猫の額ほどの願いしか聞き入れてはくれない。その姐さんが自分から祝福をしてくれると言ってくれているのだから、断る理由が見つかるはずがなかった。もっとも、その幸運を僕が生きている間に生かせるかは微妙なところではあるが。

「…お、おう。ウチに任しときや。相手が嫌がっていたところで問題あらへん。絶対むすびつけてやるさかい」

（……んっ？）

なにやら危ない単語がちらほらと散りばめられている。ぼくは背中をひと押しするくらいのものだと思っていたけれど、勢いあまってどこかに飛ばされるくらいに突き飛ばされるほどすごいものだったとは想定外の外の外である。もはや呪いと言っても過言ではないだろう。

「が、がんばります」

もちろん、嫌がる相手を連れてこないようにという意味ではあるが

。

第二話　桃の木の下で（後書き）

てな感じで、２話を書き終わりました。
実際に書いてみると難しさを痛感します。
今年中に3話をお見せできるように頑張ります。
では、また次回にお会いしましょう。

第三話　遅刻は厳禁

そんなこんなでしばらくの間会話が続いていた。
6年も会っていないと殊のほか話すことが多くて、会話が弾んだからだ。
ぼくとしても退屈に感じることは一切なく、むしろとても充実した時間になっている。

「こんなに姐さんとしゃべったのは久しぶりですよ」

「うちも久しぶりで楽しかったわ！こんなに成長したリックを見ることもできたさかい。
“男子三日会わざれば刮目して見よ”ってやつやね」

“男子三日会わざれば刮目して見よ”というのは、東方で使われる格言のこと。
男の子は三日も会わないでいると驚くほど成長しているものだという意味らしい。
もともと姐さんは東方に住んでいたので、こう言ったこともよく知っているのである。

「3日ではなく6年ですからね。いやでも成長しますよ。師匠に弟子入りして修行をしてましたし」

姐さんに会いに来られなくなるほど内容が濃くて、最初の1年間は家に着くなり泥のように眠る毎日を送っていた。
そのおかげで今では基礎体力も昔とは比べ物にならないほどついたし、精神面でも同様のことが言える。

「せやったんかい？そりゃあ成長するわな。どのくらいの時間やっとるん？」

「えっーと…そうですね、だいたい朝から夕方までくらいです」

本当は夜までやり続けたいそうなのだが、ぼくとしても薬の勉強もしなければならないので夕方までで勘弁してもらっている。

将来、店を継がねばならないので疎かにできないのだ。

父さんはリズリィに後を継いでほしかったらしいのだけど、薬に関しては全く才能がないため早々とその野望は潰えてしまった。

どのくらい才能がないかと言えば、

『金輪際、リズリィに薬を作らせるな。いいか？これはお願いではない…命令だ』

と、父さんに言わせたほど。

その時の父さんは死を宣告された様な顔をしていた。

父さんの頭の中で、“リズリィ＋薬作り＝混ぜるな危険”という計算式が飛び交っていたのだろう。うーん…わが妹ながら恐ろしい。

「てことは、今日は休みっちゅうことやな。会いに来てくれたんやし」

「……へっ？」

今日の修行がないとは一言も言っていないと思うけれど…なんでそんなことを言ってるんだろう？んー…わからない。

「いえ、今日も普通どおりありますよ」

「ふぅ～ん。せやったんかい。こんな時間まで話してるからウチはてっきりそうやとばかり思ってたわ！」

（……んっ？こんな時間？）

まだそんなに経ってはいないと思ってたんだけど…。
そんなにまずい時間になっているのだろうか？

「ちなみに今は何時ですか？」

「せやな…リックと話し始めてから1時間てとこやな」

その言葉を聞いたとたんに体中の穴という穴から冷汗が噴き出してきた。
まさか1時間も話し込んでいたとは…完璧に遅刻だ。

（今のうちにいいわけでも考えておくべきだろうか？いや、生半可ないいわけでは火に油を注ぐ結果にしかならない。こうなったら心からの土下座をする方向に持って行った方が…）

僕の頭の中ではどちらにするべきかの葛藤が行われていた。
それが行動として表れているかのように、僕の両手は土いじりをしたりその辺の雑草を引き抜いたりしていた。
すでに大人と言っても差支えない年齢の男性がとるであろう行動とは明らかにかけ離れている。そんなことはとうの昔にわかってはいる、が止められない。
それは勿論、結論が出ていないから。

…こんな状況であっても誰にも声をかけられていないことがせめて

もの救いだろう。
もっとも、声をかけるのを躊躇するほどの奇行に見えていたのであれば話は別だが。

「16年か…。短かったな～ぼくの人生」

師匠が阿修羅のごとく怒っている姿が目に浮かぶ。
きっと今頃は、どんな罰にしようかと考えているに違いない。
あの人は晩御飯に何を作るかを決めるような感じで、僕に課する修行内容を決めているのだ。

「遊びに行くなら山と海、どちらがいい？」

思い起こせば、この師匠の何気ない言葉がそもそもの始まりであった。
当時は本当に遊びに連れて行ってくれるのかと思っていたので、何も疑うことなく山を選んだ。次の日、目が覚めると山の中腹で目隠しをされた状態で放置されていた。
何が何だか分からなかったけれどとりあえず目隠しを取ってしまおうと思い、おもむろに手をかけたが…取れなかった。
その時に昨日聞かれたことが何を意味しているのかに気が付いたのだ。

「サラッと言ってるわりに、なんやえらく深刻なことを言っとるな」

「どうすればいいですかね？」

こうなったら姐さんに知恵を拝借するしかない。いつものようにすばらしい方法を考えてくれるはずだ。これでやっと一安心でき――
――

「そんなもんあらへん！」

――ないことはわかってましたよ、ええ。人生そんなに甘くないってことですよね。

まぁ…これで覚悟は固まりました。あとは砕け散るのみ！

「それじゃあ、姐さん。お話できて楽しかったです。それでは」

謝辞もほどほどにしつつ、師匠のところに向かう。いまさら走って行っても間に合わないことはわかっていたが、一分一秒でも早く着こうと思い、走っていく選択肢をとることにする。

まず、深い深呼吸をして体全体の余分な力を抜き、それから足にマナを集中させる。

昔ならこの動作をするのに2，3分はかかっていたが、今ではコンマ数秒もかからずに行うことができる。

一見かなり地味で単純そうな動作ではあるのだが、これができる人とそうでない人とでは雲泥の差がでてくるらしい。

実際にできない人を見たことがないので何とも言えないところではあるが…。

（この分だと、１０分かからずに着くかな。）

いつもより飛ばしている分、１０分ほど早い目算をはじき出す。

もちろん、普段は見かけないような珍しい植物を見つけてしまう、あるいは何者かに襲われるなんてことが一切なければという仮定条

件のもとではあるのだが…。
まぁ、そんなことは今までにそこまでなかったから大丈夫なはず。
（いや…この際、何か食材でも取って行って師匠のご機嫌をとる方法も悪くない。自然豊かなところだから探せばいくらでも見つけられるし。）

そんなことを考えていると、

「おーい。久しぶりだな！」

僕の右手側にある山の中から、男性特有の低い声で呼び止められる。
呼ばれた方を見てみると、村にただの一軒しかない宿屋を営んでいるおやじさんの姿が見えた。
木で編んだかごを背中にかるっているのを見ると、どうやら山菜を摘んでいたらしい。
おそらく宿屋に泊まった旅人に新鮮な山菜料理を作るための食材を採ってきたのだろう。

「お久しぶりです。珍しく宿屋の方にお客さんですか？」

いつもお客さんがいないのが当たり前のように返事をすると、おやじさんは「珍しくは余計だ！」と笑いながら僕の方へと近づいてきた。

「で、その珍しいお客さんはどんな人ですか？」

この村は観光客が来るような名所はない。
どんなモノ好きがやってきたのか気になったが、先ほどのことを思い出し予想がついた。

おそらくは僕に道を尋ねてきた人のことだろう。

「そのお客さんは女性なんだが、これがまたえらく美人なひとでなぁ…。もう１０年…いや２０年わしが若ければその場で口説いていたかもしれん」

実際、あの人であればそう思われるのも仕方がない。
あの容姿で迫られたら男であれば二つ返事で結婚してしまうことは容易に想像がつく。

「そんな美人が何しにここへ来たんですかね？」

うちの薬屋は他の店で扱っていない薬を置いているわけではない。
せいぜい傷薬か毒消しくらいなものだ。

「そう言えば何しに来たか言ってなかったな。まっ、美人に悪いやつはいないさ。おれの経験だけどな」

「そんなもんですか？」

「そんなもんさ。じゃあ、そろそろ行かせてもらうぞ。あんまり遅いとカミさんに怒られちまう」

笑いながら話し終わりまた山の方へと分け入っていった。
どこの家でもカカア天下なのは変わらないらしい。

「…って、ぼくも早く行かないといけないんだった」

ぼくはそのことに気づいてからすぐにまた走って行った。
無論すでに間に合わない時間であることには気付いていたが。

第三話　遅刻は厳禁（後書き）

去年までに一話あげるつもりでしたが、バイトが忙しくて手がつけられませんでした。申し訳ありません。
なお、１月はテストで忙しいため書けるかは未定となっております。
駄文ではありますが、今年度もよろしくお願いします。

第四話　師匠の寝顔

あれから１０分ほどで当初の目的地であった場所に着いた。うちの村からは割と離れた場所に位置しているため、人の気配が全くと言っていいほどない。しかし、寂れているのではなく、ただ閑散としている…そういったほうがよりふさわしいだろう。

周りは風で木の枝が揺れる音や山からコンコンとわき出てくる湧水の音で包みこまれ、その音が体に流れ込んでくる感じは何とも言えない心地さを与えてくれる。

（ふぅ～。ようやく師匠の家に着いた）

あそこに見える少し小さめな家が師匠の家である。”小さい”とはいっても４人で住んでいる自分の家と比べてなので、１人で住むとなれば手に余るほど広い。しかし、その広さは１人に孤独を感じさせる。過去に一度だけ、家を狭く作り直すように言ったこともあったが、

「今はお主がおるからの…その必要はない」

と、頭をなでられながら嬉しそうに答えてくれた。その日から僕はできるだけ多くの時間を一緒に過ごすことを決めた。もうそれからずいぶんと時間が過ぎたが、今でもその気持ちは変わっていない。

「師匠～！遅れてすいません。不肖の弟子が参りました」

そう言ってからドアを開けて師匠の姿を探す。だが…見当たらない。

いつもであればテーブルに備え付けられている椅子に腰かけてお茶を飲みながら本を読む。
もしくは、新しく考えた料理をキッチンで作っているはずなのだが…。

（おかしいなぁ…どこに行ったんだろ？）

仕方なく家じゅうをしらみ潰しに探していく。しばらくして、最後に残った部屋が寝室であった。この部屋だけは足を踏み入れたことがなくて入るのが少々ためらわれた。
だが、そのためらいも入ってみたいという衝動には逆らうことができず――――

（これは師匠を探すためであって部屋を見たいとはこれっぽっちも思ってない。）

――――頭の中で今からすることを肯定し、ドアを開ける。そこにはごくごく普通の寝室があった。服を入れるためのクローゼットが置かれ、大人が2人一緒に寝転んでも余裕のあるくらいの大きさのベッドが寝室の3分の1ほどを占めている。

そのベッドの上がこんもりとなっているのを見て、まだ師匠が寝ていることを初めて確信する。師匠が寝坊するなんて初めてのことで驚きが隠せない。しかし、もっと驚いたのは師匠の寝顔を見た瞬間であろう。日頃の顔と寝顔とではギャップがありすぎて脳内処理が追いつかなかった。

（このかわいさは…異常だ。）

しばらく寝顔を眺めていたかったがあまり留まると起きてしまい

そうなので、回れ右をして寝室を後にした。それにしても師匠が寝坊だなんて…。実際に見てきたいまでさえ信じられない。明日は雪でも降るかもしれないな。

まぁ…そんな冗談はさておき、師匠がいまだに眠っている。つまり、朝ごはんを用意しなければならないのは当然――――僕の役目になるわけだ。

家では手伝い程度しかやっていないが、一通りの料理の作り方は師匠から教わった。ついに、その成果を発揮する時が来たのだろう。

とりあえずキッチンへと向かい材料を確認する。あるのは野菜が少々とお米ぐらいなもの。

さすがにこれでは味気ない食事になってしまう。せめて肉か魚があればと思い探してはみたが、やはり見つからない。どうしようもないので、現地調達をすることにした。

勢いよく家から飛び出して向かう先は近くを流れる渓流。

源流を山からの湧水に持つその川の水は、そのまま飲み水として使えるほど澄んでいる。

夏になるとよく水遊びをした思い出の残る場所でもあった。

すでに雪解けも済んでおり、魚を捕るには全く影響もなさそうだ。

「さぁ、がんばるぞ！」

その掛け声とともに気合を入れ裸足になり、未だに冷たいであろう川へと進む。いつもであれば釣竿を手に取り餌をつけて魚を捕るのだが、それではいつ魚がかかるか分からない。そんなわけで少々乱暴な手段を今回は取ることにする。

川の真ん中あたりにまで移動し流れに逆らわないようにしながら

足を肩幅まで開く。そして、足が冷たいのを我慢し全身の力を抜く。しばらくすると異物が入ってきたことを察知して逃げていた魚たちが徐々に姿を現し始める。
この機を見計らっていた僕はそっと水面に左手を置き、掌にマナを集中させていく。2，3匹が僕の近くを泳ぎ始めたことを確認してから、川へ向かってマナを放つ。

それからすぐに、近くにいた魚たちが水面へと浮かんできた。ぼくは魚を素早く回収すると川から上がった。もちろん魚は死んでおらず、気絶しているだけだ。
使ったのは戦闘の際に使うための技術――発頸――である。

発頸はマナと大変に相性がよく、マナを使う者にとっては必須の技術といえよう。本来は相手の内臓を傷つける為に肉体を貫通するマナを打ち込むのだが、先ほどは川の水を媒介に魚を内臓に見立てて行った。
加減をしすぎると魚に効果がなくなるし、かといって強すぎると死んでしまう。そのため繊細さが求められる。過去に発頸を編み出した人もまさか魚とりに使われているとは思いもしないだろう。

（これだけあれば問題ない。さっさと帰りますか…）

こうして魚を手に入れ、意気揚々に家へと戻る。

家の台所に戻って先ほど捕ってきた魚を水で洗い、竹の串をさし、塩を全体にまぶす。

それから、あらかじめ外に作っておいた焚き火の近くに刺していく。
後は待つだけのシンプルな一品の完成。
川の水で洗ったお米を炊き、野菜をお湯でひと煮立ちさせ味噌を入れ、あとは待つだけとなった。

いい具合に焼けてきた魚を串ごと皿に盛りつけて、そろそろ起こしに行こうかと思っていたその矢先に、

「なにやら…いいにおいがするの～」

「あっ…師匠。おはようございます」

師匠が目覚めてしまった。あの寝顔をもう一度だけ見たいなぁ…なんて思っていたのに…。
少々と言わず、かなり残念な結果となった。

「ん！？顔に『残念』と書いてあるが…どうしたのじゃ？」

自分で思っている以上に残念だったことを理解した。しかし、寝顔のことだけはばらしてはならないと思いなおし、

「いえ、少し味噌が多すぎたかなぁ…と思いまして」

自分にあり得そうな嘘をついてごまかす。僕は、これがうそをつくときの鉄則だと確信している。そしてその鉄則は師匠にも効いたようで、

「せっかく作ってくれた食事にわしがケチをつけるわけがない。それと、普段はヒルデと呼ぶように言っておいたはずじゃ」

少し怒られはしたが何とかごまかせた。てか、朝からドタバタしていて本名――ヒルデ＝ルイーレ――で呼んでいなかったことにすら気づいていなかった。

うちの師匠…もといヒルデさんは師匠と呼ばれることがあまり好きではない。理由はいたって単純で、年をとったように感じるからだそうだ。使う言葉が少し古いので師匠のイメージとしてはぴったりだと思うのだが…そのあたりはやはり女性だからだろう。

「以後気をつけます。では、さっそくついじゃいますね」

そう言ってすぐにお茶碗にご飯をよそい、味噌汁は熱さも考慮して木のお椀に注ぐ。お茶を入れて飲み物の準備も終わった。あとは食べてもらうだけ…。

すでに椅子へと腰かけていたヒルデさんはそれぞれの料理に手をつけ、

「うむ、なかなかに美味じゃ。奇を衒わずシンプルに作っているところが良い」

と、美味しそうに食べながら一言。

「その一言で満足です」

これが僕の正直な感想である。

後は修行の方でもおほめの言葉をもらえれば今日は言うことなし。

今日はいつもの二割増しくらいは頑張りますか。

第四話　師匠の寝顔（後書き）

なんとか1月中に一話を書き上げる事が出来ました。
テスト勉強のまっただ中にいたのですが…パソコンについつい向かっている自分がいました。

…てな感じで４話です。
このあたりから全く説明のない単語が少しずつ出てきますが、一区切り付いたら人物紹介も含めたものを書きたいと思っているので、ご了承ください。

第五話　ひざまくら

「あう〜」

奇妙な声を出しながら地面へと倒れこむ。原因は食事の後の修行。
二割増しを意識しすぎてペース配分が狂ってしまったのである。
一方ヒルデさんは――――

「ふむ…体調は悪くなさそうじゃな」

――――僕の首筋に手を当て体の調子を診ていた
汗一つかいていないのは悔しいがひんやりした手が気持ち良く何も
言えなかった。

「疲れてるだけです。はぁ、はぁ…今日は飛ばしすぎ…まし…た」

…やばい。眠気のビックウェーブが襲ってきた。
意識のあるうちに家に帰ろうと必死に体をよじり腕に力を入れ立ち
上がろうとする。
だが、疲れが四肢をむしばんでいき…そして意識が途絶えた。

次に目が覚めて最初に飛び込んできたのは顔らしきものだった。
寝ぼけてピントの合わない眼で必死に確認すると、それはヒルデさ
んの顔であった。

目を凝らしてもう一度確認をしてみたが先ほどの認識と変わらないままである。

（顔がやけに近い…）

どうしてかと思い、辺りを見回してみる。
そして初めて自分がどんなに幸運な状況にいるのかを知った。
なんと、ひざまくらをされているのだ。とてもこの世のものと思えない柔らかさである。
今日の僕は幸運の女神に溺愛されているらしい。
まぁ、これだけ幸運すぎると後からのしっぺ返しが怖いが今なら死んでも悔いはない。

「ようやっと起きたか？」

目が覚めたことに気づかれてしまったのか！？
いや…まだ気付かれてはいないはず。
とすると、ここでとるべき行動はただ一つ。
今の言葉を完全に無視して眼をつむり、狸寝入りをかますことであろう。

「ん？…気のせいじゃったか」

そう言いながらヒルデさんは視線を元に戻す。
つられるように視線の先を目で追うとそこには真っ赤な夕日が見えた。
その情景は言うまでもなく美しかった。そして、それでいて何より圧倒的な存在感を放っていた。
風景画として存在していれば、どれだけの値がつくか見当さえつきそうもない。

が、それでも私的な感想としてはその夕日を見つめるその横顔の方が美しかった。
だからこのまま眺めていたかった…やがて気付かれるであろうその時まで。
そしてそのまま刻々と時間だけが過ぎやがて夕日が沈み終える頃になると、

「そろそろ良いか？」

「はい！？」

――――どうやら初めからばれていたらしい。
今度こそ潔く観念したぼくは頭がぶつからないようにゆっくりと起き上がる。
だが、寝顔のこともあいまって余計に顔を合わせづらく視線があちこちに泳いでいた。
すると、僕の挙動不審な様子を見て師匠は、

「別に怒ってはおらん。ただ…」

そうつぶやきながら怒っていないことをアピールをし、そのあとの言葉に詰まった。
続きが気になった僕は、

「ただ…なんですか？」

オウム返しに聞き返した。

「いや…なに。お主と出会ってからずいぶん経ったと思ってな」

嬉しそうに口元をほころばせながらつぶやく。
確かに6年という期間は長い。けれど、僕にとってはあっという間の6年間であった。
それと同時に大切な思い出の詰まった6年間でもあるが。

「あの頃はまだまだ小さかったのに…今ではわしと大して変わらなくなった」

それもそうだろう。
ヒルデさんと出会った頃の僕は、村に住んでいる男の中では一番低かったのだから。
まぁ、今でもその実情は大して変わってはいないが…。

「僕としてはもう少し身長がほしかったですけどね」

毎日のように牛乳を飲んでいたのに大して伸びなかったのはかなりショックだった。
その分の栄養がどこにいったのか不思議でならない。

「わしとしては同じ目線で話せるからこのほうが良い」

「うーん…それなら背が小さいのも悪くないですね」

背が小さいのはもちろん好きではない。というか好きな人もそれはそれで珍しいだろう。
だって背が大きいことにメリットはあれども、背の小さいことはデメリットでしかないのだから。

「それに・・・」

言葉を続けながら僕の頭の方に手をやる。
そして、昔と何一つ変わらない柔らかな手で頭をなでた。

「頭をなでやすい」

そう言えば、昔はよく頭をなでてもらっていたっけ。
その時はずいぶんと大きな手だったと思ってたんだけど…。
今ではだいぶ小さくなったように感じられる。

「では、このまま背が伸びないように頑張ります」

とは言ったものの、いったい何をすれば良いのだろうか？
近いうちにラスに手紙を書いて聞いてみるかな…あいつなら何かしら知ってるだろうし。
本当は会いに行くのが一番なんだけど流石に遠い。
腕を組みながらそんなことを考えていると、

「いったい何をするつもりやら…」

そう言ってクスクスと笑われてしまった。

「い、今のは聞かなかったことにしたください」

慌ててしゃべったせいか少し舌を噛んでしまった。
そのことが余計に恥ずかしくて思わず下を向いてしまう。

「ん～。よく聞き取れんかったが何か言ったか？」

口に手を当てて、ふふふ…と笑っている。

どうやら僕の言ったことを正確に理解した上でからかっているとみて間違いない。
特に腹が立ったというわけではないが口でも負けた気がしてくやしい。
というわけで…ここはきちんと言い返そうと思う。

「朝の寝顔は綺麗でしたね。と言ったんです」

この返しは想定外であろうと予想し、ニンマリと笑みを浮かべる。
自分としては良い返し文句だと思える内容だった…そう思い、どうだ！と言わんばかりに顔をあげる。
しかし、顔には焦った様子が一切見受けられなかった。
むしろ獲物が罠にかかったような笑みが浮かんでいる。

「まさか自分が寝坊したことがばれていないとでも思っておるか？寝室に入って寝顔を見ていたことに気づかないとでも？そんなわけないじゃあるまい」

……はい、寝坊したことがあっさりばれてます。
想定外すぎるのはむしろ僕の方みたいです。やっぱり謝っておく方が正解だったみたい。
しっかし、なんで寝坊したことがばれたんだろう。

「いや…それは…えーっと」

「その顔は…『なんで寝坊したことがばれたんだろう』という感じじゃろ」

「うっ…」

心の声が一言一句間違えずに読まれてる。
どこからばれたのかは自分の知識の及ぶところではない。
だが、これ以上はやぶ蛇になりかねないので両腕を胸の前で上げて降参の意を示す。

「それはな…占いじゃ。昨日の結果にお主の寝坊がでたのでな」

占いで弟子の寝坊を察知するなんて…これはどう転んでも勝てそうにない。
そのうち朝食のメニューを占いで当ててくるんじゃないか？
そんな疑念が頭の中を駆け巡った。
しかし、それと同時に覚えてみたいという好奇心も持った。

「今度、僕にも教えてください」

「安心してよい。近いうちに教えるつもりじゃ」

「楽しみにしておきます。とっても」

この言葉にウソ偽りは何一つない。
もともと争うことは好きではないし、身を守るためだけに武術を習っている。
だから、戦いとはあまり直接的ではない鍼やマッサージなんかを習うのはとても楽しかった。
その経験からいえば今度も楽しくなることはまちがいないだろう。

「うむ。では明日に備えてもう今日は帰った方が良い。日も沈んだことだし」

冬に比べるとまだ幾分か明るいが、それでも十分に暗いことは疑い

ようがない。
もっとも夜空には光り輝く星たちが姿を現しており、帰る分には全く問題のない明るさではあるのだが…。
「では、今日はこれで帰りますね。」
そう告げてから僕は立ち上がり帰路へとついた。
夜空に浮かぶ星を明かりにして、温かい晩御飯の待つ家へと。

第五話　ひざまくら（後書き）

ようやく第五話をＵＰすることができました。
思うところがあり、今回から書き方を少し変えたのがその理由です。
以前より見やすくはなったのではないかと自分では思っております。

３月中に第六話をＵＰできたらなぁ…と思ってはいますが、温かい目で見守ってやってください。またのお越しをお待ちしております。

第六話　闇夜の求婚

家に帰り始めてからおよそ２０分が経過し、ようやく村にたどりつく。
このまま家に帰り待ちに待った晩御飯を食べるのも魅力的な選択肢の一つではあるが、今回はそうはしない。

「姐さんには心配をかけたし、生きていることを報告しておくか」

ということで、少し寄り道をすることにした。
とはいっても辺りは結構暗いしお腹も空いているので今朝のように話し込むつもりはない。
簡単に挨拶をして帰るのが予定である。

「ではでは、行ってきますか」

桃の木を目視できるくらいの距離まで近づいた。
すると、朝方に来た時とは異なって辺りを妙な違和感が包んでいた。
目を凝らして辺りを見回してみてもおかしなところは何一つなく、耳を澄まして辺りの音を拾ってみてもおかしなところは何一つない。
それなのに違和感があるのは単に時間帯が違うのが理由なのか、それとも…。

「何かが隠れているのか…」

だんだんと歩みを緩めつつ何が起こっても対処できるように体から

余分な力を抜いていく。
姐さんも気づいていないのかどこかに行っているのか、姿を見せる気配が感じられなかった。

「まいったな～」

近づけば何かしら行動を起こすと考えていたがそう簡単ではないらしい。
予想の上を行く相手の技量の高さがうかがえる。
また、これが事実であるならば現状は微妙なバランスの上に成り立っていると言うことができる。
このバランスを崩し間違えればどうなるかは容易に想像がつく。

「動くのはまずいだろうし…どうするかな」

現状で切れるカードを一つ一つ確認していく。
そして、もっとも有効であろうカードを即座に切る。

「だれかは知りませんが出てきませんか？」

ここまで直接的に挑発すれば流石の相手も何かしら反応するだろう。
もちろん気を抜けば、一瞬にして天国にいるであろう祖父との対面が叶うことは言うまでもないことだが…。

「ここまで念入りに隠れていたのに気づかれるとは…」

――――そう言い終わったくらいに木の上から人が降りてきた。

「まて。何もキミに危害を加えようと思ってはいない」

「……んっ？」

今が夜であることを差し引いてもよく通る声であり女性の声であった。

最近聞いたことのある声なのだがどこで聞いたかは思い出せない。

顔で確認しようと思ったが星の光だけでは輪郭くらいしか分からなかった。だが、もう一度よく見ると耳の形が普通の人と少々変わっていることが分かり、疑問が氷解した。

「ひょっとして今朝、桃の木の近くで会った方ですか？」

「……なぜわかった？」

一発で当ててきた僕に驚いているのだろう。

ハッと息を吸い込んで少し間が開いてから質問と同時に肯定の意を示した。

「一番の決め手は耳の形ですかね。とても印象深かったので」

こう答えると、先ほどよりもさらに驚いたらしく返答がなかった。

別に変なことを言ってはいないはずなのだが…。

僕が気をもんでいる一方で向こうでは小声で何かを確認していた。

「どうかされましたか？」

「いや、こちらの話だ。気にしないでくれ」

「はぁ」

そういう言われ方をすると余計に気になってしまうのは仕方のない

ことだろう。
まぁ、深く聞いても藪蛇になるだけなのであえて聞くことはしないが。

「それよりも、キミに聞きたいことがあるんだが…良いか？」

「答えられることであれば」

「私と結婚してくれないか？それも今すぐに」

結婚ねぇ…。結婚かぁ…って、

「はぁ！？」

敬語がデフォルトな自分がどこかへ行ってしまうほど驚いた。
時間が経ってもそれがなくなることはなかった。
その結果、ぼくの答えを黙って待っていた相手がとうとう痺れを切らした。
ズンズンと僕に詰め寄っていき、僕の目の前1メートルで立ち止まり――――

「だ・か・ら、結婚してくれと言っている。この言い方では伝わらなかったのか？それなら、“キミの一生を私に欲しい”とか“毎日、みそ汁を作ってくれ”であれば理解はできるか？」

――――さらに求婚を続けている。

とりあえず結婚を申し込まれていること明らかに男の方がいうセリフであることは理解できた。
しかし、このような行動に踏み切った理由は未だに明かされていな

い。

「言っていることはわかりました。ですが、なぜ僕なんですか？」

すると待ってましたと言わんばかりの笑みを浮かべる相手。

何を言われるのかと身構えていた僕に対して、

「一目ぼれしたからだ」

先ほどとは打って変わったように真剣な目がこちらを射ぬく。

少なくとも悪意や嘘のある人のそれではないように思えた。

「…それは喜んで良いんでしょうか？」

容姿だけで結婚を申し込まれるのもいかがなものかと思う。

いや…それどころか、人並みの容姿のどこに一目ぼれされる要素があったのか。

あれこれと考えながらも率直な感想としては喜びと戸惑いとが半々。

それが最も適切だろう。

「もちろんだ。自分で言うのもなんだがスタイルは悪くないと思うし、家事全般に関しては母に仕込まれているから期待してくれて構わないぞ」

「はぁ…」

さりげなく自己アピールまで…。

確かに、同姓からは羨望の目で見られ異性であれば思わず二度見してしまうことが確約されるほどのスタイル。自分に多少なりと自信を持っていて当然だろう。

「それとも何か？キミは胸の大きい子が好みなのか？」

「あ…。まぁ」

「くっ…。所詮は胸の大きさが全てだということなのか…。脂肪の塊の分際で…」

が、胸の大きさまでを除けば…というあくまで仮定の話になってくる。

これが同性から羨望はされども嫉妬されない理由と言える。

「いや、それ違いますから！」

一見して矛盾しているようではあるがそうではない。

確かにそういった嗜好の人間がいることは否定できないし、先ほど言ったように僕自身大きい方が好きである。しかし、それはあくまでも外見を見ただけの話だ。

好意や興味なんかにはつながるかもしれないが、逆にいえばそこまでで止まってしまう。

「なんだ…違うのか。ではいったい私の何が不満なんだ」

もちろん容姿だけで考えれば不満なんてあり様がない…胸を除いて。

「容姿が相手に対する好意や興味の大半を占めることは理解できます。できますが、ぼくはそれ以上に――――」

と、途中まで言いかけて――――

「――それ以上に相手のこと、すなわち内面を知りたい。そう言うわけか？」

僕の言いたかったことを会話にかぶせてきた。

「え…はい」

言いたいことを見透かされた驚きでコクコクと頷くことしかできなかった。

そんな僕とは対照的に相手は手を叩いて笑って魅せる。

「ならば話が早い。じつはもう一つ頼みたいことがあったんだ」

「…何でしょう？」

悪意のない笑顔に見え隠れする企みに戦々恐々しつつ返事を待つ。

一拍ほど間をおいてから目線をこちらに合わせた。

「私と一緒に旅をしてくれないか？多くの命を救うためにとある薬が必要なんだ」

「それで薬屋を探していたんですか…」

この話を聞いて一つ合点がいったことがある。

それは薬屋をわざわざこの村で探していたのかということだ。

恐らくだが各地を転々としながら主なところを回りつくし、こんな辺境に来たのだろう。

「そうなるな。まぁ、これならば私の内面を知ってもらえるし目的も果たせる。私にとっては良いこと尽くしなんだが…どうする？」

そう言えばこんな交渉の仕方があったなぁ…と思いはしたが、とりあえず頭のすみに追いやる。
今この瞬間に考えるべきは頷くか否か。
そう悩むのも仕方がない。自分なんかが力になれるのか想像がつかないのだから。
けれども、もしその命が自分の手で救うことのできる命であったなら…そう考えると断ろうという気持ちにはなれなかった。

「喜んでお手伝いさせていただきます」

そう答えると解りきっていた答えを聞いたようにウンウンと頷く。

「それは良かった。出発は明日で構わないか？」

すぐに出発したいということは、うちの店にはお目当ての薬がなかったのだろう。
目的の薬がなかったのだからこんな辺鄙な村に留まっておく理由は当然ない。

「それは一向に構いません。ただ…両親と（特に）他一名に許しをもらわないと」

しばらく会えなくなるというだけでもまずいのに、さらに女性と二人でともなれば命がいくつあっても足りない。
当然ではあるが、バットエンドに向けて一直線に走りぬける特殊な趣味を僕は持ち合わせていない。
何とかしてフラグを回避しなければ…明日の朝日が拝めなくなる。

「ふむ。将来の家族に挨拶しておくのも悪くはない」

“将来”という言葉を聞いて思わず肩をすくめる。
この人はまたそんなことを言って…。
こじれそうな話をさらにややこしくそうでどうにも怖い。

「いや…。必ずしもそうなるわけではないと思うのですが」

承諾したのはあくまでも旅をすることであって、結婚では断じてない。

「可能性があるだけで十分すぎるというものだ。では早速あいさつしに行こうか」

言いたいことを言い終わると、クルリと背を向けて自宅の方へと歩いて行った…僕の首根っこを掴んで引きずりながら。
身長差もあいまって実に情けない構図となっている。

「ところで、なぜ僕の家をご存じで？」

教えていないのに方向が合っているのが不思議でたまらない。

「……。乙女のたしなみというやつさ」

――――深くは聞かないでおこう。

第六話　闇夜の求婚（後書き）

なかなかきりのいいとことで終われなかった7話ですが、いよいよヒロインの登場です。
お楽しみいただければ幸いです。

７／１４に本文を修正いたしました。
話の大筋は以前のままですが、所々をいじくってます。
以前よりは話がわかりやすくなっているか心配ですが…たぶん大丈夫かな。
感想や意見なんぞいただければ幸いです。

第七話　将を射んとすれば

「ただいま」

勢いよく玄関のドアを開け帰ってきたことを告げる。
すると、間髪入れずに返事が返ってきた。

「料理も風呂も支度してないが私ならいつでも食べてくれ構わないぞ」

無論、家の中からではなく僕のすぐ左側からである。
らしいと言えないこともない言い方ではあったがあまりにもストレート過ぎた。
口をパクパクさせる以外の行動が一切とれないくらいには。

「いや…食べるというよりはむしろ私に食べられるという方が正確か」

「……。」

もはや口さえ動いてはくれなかった。
それでも唯一の救いだったのはこの場には二人以外に誰もいないことくらいだろう。

「何も反応せずに沈黙を決め込むとは…もしかして放置プレイが好きなのか、キミは？」

「本気で怒りますよ」

僕は決してアブノーマルな思考の持ち主ではないとくぎを刺しておく。
怒っていると言われたことに驚いたのか、きょとんとした顔をしているようだった。
しかし、その予想は悪い意味で裏切られてしまった。

「どんな理由であるにせよキミが私だけを見て考えてくれるのであればこれほど嬉しいことはない」

先ほどとはまた違った恥ずかしさに二の句が継げなかった。
かといって黙っているのは間が持たず、無理に話題を変える。

「まぁ、それはともかくとして。とりあえず家族を紹介しますので…」

そそくさと居間の方へと移動する。
一方、彼女は本当に怒ってくれるものだと期待していたようでやや不満気な顔をしていた。
普通は逆だろう、と突っ込みたいところだ。

ガチャ、ガチャ
居間のドアを開けると夕食のいい匂いが漂ってくる。

「お～う、お帰り！」

一番に迎えてくれたのは意外にも父さんだった。
妙にテンション高いなーと思ったらテーブルの上のとっくりを発見した。
珍しく酒を飲んでいるらしい。

「今日はやけに遅かったな。何かあったのか？」

「実は…「お初にお目にかかります。義父様」」

事のあらましを説明しようとした矢先に後ろの方から声が響く。
手で制しようと後ろを振り向くがすでに後ろにいなかった。
慌てて前を向くと楽しげに父さんと喋っている表情豊かな女性がいらした。

「マーラと言います。ふつつかな“妻”ですがよろしくお願いします」

お手本のようにきれいな姿勢で深々と頭を下げる。

「…そうか。うちのリックをよろしく頼む」

へぇ～。マーラっていう名前だったのか…。
って、なんかさっきとはまるで別人なんですけど。
あそこまで猫を被られるといっそ清々しい気もするから性質が悪い。

「あら～。こんなにかわいらしい娘がこの辺りにいたかしら」

声のする方を振り向くとそこは台所。
主婦が毎日のように家族のために愛情のこもった料理を作る戦場である。
ここまでくれば声の主が誰であるかは火を見るより明らかだった。

「あっ、母さん。実はね「義母様。はじめまして“妻”のマーラです。」」

またもや先を越されてしまっていた。
というか、いつの間に父さんの所から母さんの所へ移動したんだろうか。

「リッくんが年上好きだったなんて母さん知らなかったわ。てっきり妹属性（シスコン）だとばっかり…」

さもそれが真実であるかのように頬に手を当て困った顔をされる母さん。
しっかりしている割に天然な人なので冗談なのかよくわからないから怖い。

「いや…妹属性（シスコン）なんて母親の言うセリフじゃないよ！むしろ止めるべきじゃない？」

「え～なんでよ？まさか私がお腹を痛めて産んだリズリィが可愛くないとでも言うつもり？」

めっそうもございません。
貴方様に似てすくすくとかわいらしく成長しております…胸を除いて。
そう言おうと思ったけど、どこでリズリィが聞いているか分からず断念。

「そう言うつもりで言ったんじゃ…ないんだけど」

そして、なぜかしどろもどろに言い訳をしている自分がいる。

「冗談よ。冗談。まぁ、ゆっくりしていってね～。」

そうお客様に言い終わると笑いながら台所へ戻っていった。
どうやら僕の反応を見れて満足したようだ。
僕からすれば被害を最小限に抑えられたことを喜ぶべきなのか…複雑な気持ちではある。

「君には妹がいたのか？なら早く紹介してくれると私としては嬉しいのだが…。なにせ私の義妹になるのだからな」

そんなことを考えているといつの間にか貞淑な妻のように僕のすぐ後ろにくっついている方からお声がかかる。
そう言えばこれが一番の問題だったと思いだして思わず頭を抱えてしまう。

「いるにはいますが…」

接触していない今のうちに注意しておくことなんかを教えておけば…。
無理やりにプラス思考へと思考を切り替えて後ろを振り返ると、

「“いるにはいる”ってどういうことですにーさん？」

目と鼻の先に朝までは妹だった何かがこちらを睨んでいた。
夢であるなら覚めてほしいと願わんばかりの事態に心臓が止まりそうになるほどだった。

「い、いや…。これといって恣意的な意図はないぞ」

このままだと僕の命から先に無くなってしまう…。
そんな最悪の事態に対処すべく頭の中から今までに培ってきたマニュアルから有効な手段を模索していくが、

「まぁ、そう言うことにしておきます。ところで…こちらの方はどちらさまです？私に紹介していただきますか？」

今回に限り蛇のようにしつこい追及がなかった。

会話の一つ一つから矛盾点を探し出し、次第に相手を追い詰めるあれが…。

まぁ、それはともかくとしてとうとう二人が出会ってしまったのだ。

「お初にお目にかかる。私の名前はマーラ。君の兄上とは世間一般で言うところの夫婦関係にある」

先ほどとは打って変わったストレートな物言いが事実を淡々と話しているように感じさせる。

一方、リズリィの方は夫婦という言葉を聞いた後くらいからワナワナとこぶしを震わせていた。

「私には手を出してくれないのに他の女に手を出すなどどういう了見ですか！？」

そう言うのとほぼ同時に僕の肩を両手で掴んで前後に激しく揺り動かした。

どうやら頭に血が昇っておりいつもの冷静さが欠けているようだった。

「その件に関して色々と言いたいことがあるけど、とりあえず夫婦ってのは誤解」

むしろ“私に手を出す”ってところに色々と言ってやりたかった。

けど、誤解させたままだと流石にかわいそうなのでやめておくこと

にする。

「……。誤解ですか？」

「そう誤解なんだ。あくまでもそうなる可能性が０％でないというだけ」

嘘はついていないが本当のことでもない。

というのも、あまり彼女を調子に乗せるのは負けた気がするから。

「容赦ないことを本人の前でサラッと言ってのけるね、キミは。まぁ、そう言うところも魅力の一つだと思うよ」

ハァっとため息をつきながらもうれしそうにそうつぶやく。

それとは対照的に笑顔を見せているリズリィはぼくの左腕にしがみついていた。

「やっぱりそうでしたか。だってにーさんは妹属性（シスコン）ですもんね」

これが親子のなせる技なのか…。

そう思わせるほどの衝撃に満ちた一言が無意識下で僕の膝を折らせる。

「否！断じて否だ。そんな嗜好は一切ない。むしろぼくは年上好きだ」

今度は無意識に本音が出てしまった。

慌てて取り繕おうとするも肝心な時に限って何も思い浮かばない。

「こんなところでプロポーズとは…。せめて二人っきりの時に言って欲しかったな」

自身の勝利を誇示するかのような物言いに戦々恐々となってしまう。
もちろん言っていること自体はただの憶測にすぎない。
しかし、火に油を注ぐ程度には何の問題のない威力を持っていた。

「私をだしに使ってのプロポーズ。いい度胸ですね…にーさん？」

もはや何を言っても無駄に終わるのは明白だった。
助けを求めようにも父さんはお酒が入って聞いてくれそうにない。
母さんは面白がって逆に煽るような気がしてならない。
頼みの綱は彼女だが…

「明日にでも挙式をあげるべきか。いや…むしろ両想いが確定した今、既成事実を作って逃げられないように夜這いをかける方が先か。悩むところではあるな」

何やらぶつぶつと不穏な内容を隠そうともせずにしゃべっていた。
ここまで追いつめられると覚悟を決めるしかなかった。

「でければひと思いにやっちゃって下さい」

「却下です」

こうして死神のカマは微塵のためらいもなく振り下ろされていくのだった。

第七話　将を射んとすれば（後書き）

相変わらずのスローペースでありますが、ようやく書き上げたので上げさせてもらいました。
忌憚のない意見を頂けると作者としましてはとても参考になりますので、よろしくお願いします。

第八話　殺人級の手料理

床にはさっきまで人間だったものが横たわっていた。
固く握られた手の中には木で作られたお箸が一膳。
どうやら何かを食べていた最中に倒れてしまったようだった。

「……生きてはいるみたいで安心した」

声のした方を振り向くと心配そうな顔をした女性がたたずんでいた。
手を貸すそぶりを見せられるが力なく首を振ることしかできなかった。

「キミの料理はいったいどうなってるんだ！この反応はどうみても毒かそれに準ずるものを体内に取り入れるのと同じものだぞ」

少しぴくぴくと動いている人間らしきものを指さしつつ声を荒げる。
わずかに動く首を縦に動かそうとするが、人すら殺せそうな視線に耐えきれそうにない。
よって、何もすることができずただ沈黙を貫いた。

「失礼なことを言ってくれますね。人の料理に向かって毒とはなんです！」

あまりにストレートな物言いに食卓をバンと両手でたたき怒りをあらわにするリズリィ。

「ならば訂正しよう。餓死寸前であっても吐き出しかねん不味さだ」

しかし、あまりに容赦のない口撃に元々ない自信がさらに揺らいでいく。
流石にここまで言ったことはなかった。
むしろ、「前衛的な味だね」とかでなんとか凌いできたのだから我ながらすごいと思う。

「そ、そんなに不味くないですよ。ねー、お母さん？」

何とかごまかそうとして母さんへと助けを求めるが…

「そこだけは私に似なかったのよね～。お父さんもそれなりに作れるのに…」

ついには「情けない」とまでいいながらため息をつかれるしまい。
母さんが料理がうまいのは日頃を見ていれば言うまでもないことだ。
だが、父さんが料理を作れるというのは知らなかった。

「これでもまだそんな世迷言を言う気なのか？」

父さんも料理を作れることはリズリィも知らなかったらしく、父さんの方を見て小さく「裏切り者」とつぶやいていた。
その言葉を聞いた父さんはお酒を食卓に置き、母さんに泣きついていた。
その年で泣きつくなよと言いたいが、母さんが嬉しそうにしていたのでまぁ良しとしよう。
こんなところを見るとやっぱり夫婦なんだなぁ…としみじみ思ってしまう。
僕も将来はこんな感じになれるかなと考えてはみたが、さらに白熱するやり取りが歯止めをかける。

「…いいでしょう。百歩譲って私の料理が人の口に合わないとしましょう。ではあなたの料理はどうなんです？にーさんの妻を名乗るくらいには美味しい料理を作れるんでしょうね？」

どうやら開き直って相手の料理にケチをつける目論見らしい。
図らずもその構図が嫁姑の様相をしているのに気づいていないのがまた面白い。

「その言葉を待っていた。義母様、台所をお借りしても？」

「いいわ。好きなものを使ってくれてかまわないから」

未だに父さんを抱きかかえている母さんはこちらを振り向かずに返事をした。
意識は向けていなくとも会話はしっかりと聞いていたらしかった。

「では、少し待っていてくれ。すぐに作ってこよう」

そう言い残すと台所の方へと向かっていった。

それから10分ほどたった今、ようやく僕の体も動くようになったので、簡単に服についた汚れをはらってから先ほどの誤解を解くべく立ち上がる。
まずは両親が先決だろうと考えを決めていざ話そうとするが、未だに二人共がいちゃいちゃしていて割り込んで良い雰囲気ではない。
無理に割り込むこともできるけど、どうせ母さんに力ずくで黙らされるのでやっても無駄だということは経験で知っている。

てなわけで、さっきの続きをしなければならないわけで…。

「あの～。リズリィさん？」

刺激を与えないように恐る恐る声をかけてみる。

「……どちらさまです？生まれてからずっと一緒に育った妹より、昨日今日に出会った年増を選ぶような兄なんて私にはいませんけど」

これはまた随分とご立腹のようである。

やはり、先ほどの年上好き発言から結婚の話に入った辺りが引き金となっていることを改めて認めざるを得ない。

まぁ…彼女が生きていることを考慮に入れれば本気で怒ってはいないようだが…。

けれども、さっさとこの爆弾を処理しなければ予想が現実となる日もそう遠くはないだろう。

まぁ、結局は先ほどと同じことを繰り返すだけだが。

「だからさっきも言ったと思うけど結婚云々はわからないんだって！彼女と約束したのは一緒に旅に出ることだけだ」

改めて誤解を解こうと言った一言だったが、それは予想以上の反応を引き起こした。

「にーさん…旅に出られるんですか？そ、そんな話は聞いていません」

それは誰が見ても分かるほど見事なうろたえぶりだった。

“うろたえランキング”なるものがあれば殿堂入りは間違いない。

「だから今、話しているんだ。人の命がかかっているらしい。助けになるかはわからないけどできるだけのことをするつもりだ」
僕の言葉に偽りがないことを感じ取ったのか、あるいは少し考えて冷静になったのか、それとも両方なのか僕にはわからない。
が、先ほどのうろたえぶりがうそのように消えていることだけは確かである。

「そう…ですか。にーさんがそう言うということは決心を変えるつもりはないみたいですね」

むしろ、来るべくしてきた残酷な運命を受け入れるような諦めにも近いものを感じる。
けれども、どれほど懇願されても僕の決心は揺るがない。

「悪いな。まぁ…どのみちあと半年もしないうちに旅には出るつもりだったんだ。色んな所に行って見聞を広めたいし、腕試しもしてみたい」

これにもうそ偽りは全くない。
元々は我が家のしきたりの話を父さんから聞いたところから考え始めたことではあるが、そのことがなくともいずれは旅に出ているだろう。
つまりは今回の出来事が僕の背中を押すくらいのきっかけになった。
あるのはそんな事実が一つだけ。

「わかりました。そう言うことでしたら私もお供させていただきます」

僕の意に逆らわないように考えたようだが、それは僕の望むところではない。
だから、兄として妹を諭さねばならない。
どんな手段を講じてでもついてくることは火を見るより明らかだから。

「駄目だ。ぼくは誰かを守れるほど強くない」

以前、師匠に聞いたときにはとっくに免許皆伝しているとのことだった。
が、実践となると話はまた別であり師匠の教える流派はむしろ免許皆伝から極みに至るまでが重要とのこと。これが現在に至るまで師匠にかすり傷一つ当てられない理由だそうだ。
つまり、他人を気遣いながら戦う力は今の僕にはない。それが僕の出した結論である。

「問題ありません。自分の身体くらいは自分で守れます。それに…にーさんを危険と悪い虫から守るのが私の使命なんですから」

かなり真剣な目で言われたものだから、「良い虫なら良いのか」と突っ込む気分にならなかった。

「それでも駄目だ。お前に万が一のことがあれば父さんたちに顔向けできなくなる」

「…わかりました。にーさんがそうおっしゃるなら私はそれに従います」

これ以上のやり取りは無駄だと悟ったのか、頭をがっくりとうなだれた。

これでもう大丈夫だろうとそう思った。

「聞き入れてくれて助かったよ」

そう言った瞬間だった。そんな浅はかな考えが一蹴されたのは。

「では、私は台所で年m…いえ、義姉さんと親交でも深めるとしましょう。邪魔は…しませんよね？」

「……。……。」

このシナリオを最初から考えていたのであれば歴史に名を残す詐欺師になったに違いない。

僕の背中を押した彼女がいなくなれば取りやめざるを得なくなるのは自明の理。

慌てて止めようと椅子から立とうとするも目で制される。

台所へと向かう妹を止めることのできなかった僕に残されたたった一つのこと。

それは彼女が無事に帰ってくることを祈ることだけだった。

第八話　殺人級の手料理（後書き）

妹が料理下手という定番なネタをお届けいたしましたがいかがでしたでしょうか？
次回は台所でのリズリィＶＳマーラを予定しております。

忌憚のない意見を頂けると作者としましてはとても参考になりますので、よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6196f/

槍と薬は使いよう

2010年10月10日01時07分発行